142
5
54

東京圖書館

和書門	雜書類	二七函	三大架	五冊

西 二四

駿雜話 巻之五

国立国会図書館　タイトル『駿台雑話 5巻』 請求記号 142-54

ガラス使用

駿臺雜話卷四目錄

智集

燒毫やうの事

法もとゐのこと

運慶などの仏

鴟鵂の事

青砥の續松

大佛の鐵

楠正成

武田信繁

孫臏韓信の兵法

不忘向君

源義秀

泰時と公猿

冥利家を亡ふ

兵法の大事

無と龍道

大關藏書

明治 ノ文換

国立国会図書館　タイトル『駿台雑話 5巻』 請求記号 142-54

ガラス使用

大敵(たいてき)外(ほか)になし

後集雑話巻四

焼畑(やきはた)を嘲(あざけ)る

二代(にだい)の将軍(しょうぐん)も半途(なかば)過(すぎ)ゆきし頃(ころ)、積年(せきねん)新(あたら)しき森(それ)にて、夕日(ゆうひ)楢(なら)の葛(くず)などもひろがりおひまさりよく、池(いけ)の芙蓉(ふよう)風(かぜ)もなびかず、静(しず)かなるに、伐竹樹露(きりたけきのつゆ)すくなく、とかく曇(くも)りがちなるに、諸人(しょにん)うそ寒(さむ)がりて、袷(あわせ)の上(うえ)に綿入(わたいれ)を着(き)るもあり、すこしくらく後(のち)、勾欄(こうらん)によりかかり、詩歌(しいか)を朗詠(ろうえい)し、或(あるい)は物語(ものがたり)などしてあそぶ。

燭をとくもやるよ。剣ぬきをさして。世俗の諺よ焼蓙をおく瞞しとうちやくくもあれんそのくもあれ中ひとそれ世よ何まもくも見ぬやうなあまれ。ぬきかけハ却て分明なるらしん。但我等ら思ひもくそよ在邇而求諸遠とうふ古もあとくへたとくた角。人と交まくまをたくも近きなすくきよ求るら常共幸おくん。兎を射る者的よのこと志して。おあとのくまおよおれまをもらぬよあもくへあまん。焼蓙のうへ

角くも何くら後ろ雑ん。亦記おくん。羅大経ら鶴林玉露よ悟道とうふ尼の作やて

盡日尋春不見春。芒鞋踏遍隴頭雲。歸來笑撚梅花嗅。
春在枝頭已十分。

元もとのちの我よをきよ求るあとくなると。ありとあく山野よ春を尋くらして。春そくよりの宿の梅くおれまをもらまくこれも。焼蓙をおくくらんとよくかなりて。いとおと寒くあくふ又元とよ。道よさくらうとよも陽らんのまおれ。たまくはお東哥の時。桓温三秦に入しよ。おのく

ゟ一人も又く事ゟぬと同〳〵ゟゑ。
歴〻ゟつゝ秦の豪傑王楯ゟる〻ゟ多れゟものやわれゟゑ。眼お
ゟ豪傑ゟれゟをゟ〳〵ゟて。豪傑ゟ
焼基ゟゑ〳〵ゟゟきゟゑゟゟ。又ゟゟ。古ゟゟ倭漢ゟゟ。
英雄も遠畧をもとむゝ。甚威望を敵国に及ゟゟ。
ゟゟ蕭牆のゟゑゟ敵ゟ事をゟゟゟゟ。焼基ゟゑ〳〵ゟ瞞
きゟゟゟゟ。ゟ代日本ゟ〳〵。織田信長関東関西の
諸国をゟゟゟ〳〵ゟ討ゟゟゟゟゟゟゟゟ
て明智ゟゟ殺ゟゟ。焼基ゟゑ〳〵ゟゟきゟゑゟゟ千ゟゟ
ゟ。勿ゟゟ〳〵ゟ沈吟の後ゟ義ゟのゟゟゟゟ

ゟゟ〳〵ゟ拇ゟゟ。ゟ義をゟゟゟゟ
ゟゟ。ゟゟゟゟゟゟゟ〳〵ゟゟ。ゟ名のゟゟゟ無く。
ゟゟゟ焼基ゟゑ〳〵ゟ瞞〳〵ゟゟきゟゑゟゟ
くゟ。前ゟ又ゟ読ゟゟ後〳〵ゟき方ゟゟ
又一行の乃至もゟゟゟゟ。韓退之ゟ殫竭の歌ゟ長繁八尺
空自長。殫竭二尺便且光ゟ〳〵ゟ。焔基ゟ長きゟ焔の
ゟゑ〳〵ゟゟ。ゟきゟゟ焔のゟゑ〳〵ゟゟ
ゟるゟゟゟの事ゟゟゟ。事ゟ書ゟゟゟ字ゟゟ
なゟ。ゟゟゟゟゟゟゟゟ

のごときを照らし給ふまゝを筆記して綱人廣室と、いふて照らし給ふやうに書きをわるくしてを遠慮なくしるし給ふべきを必ずとゝめくれとのよし。吾道ハ廣大無辺の法にて関尹子を引給ふ。関尹子を関令尹喜の書かるゝことよく照らし給ふまゝを畫すべきこと。関尹子を関令尹喜の書かるゝ。尹喜を老子の弟子の如くに道徳経などを言ふも此人の落ちをせざるとも。今世に伝る関尹子ハ後人の偽作なり。尹喜ハ名を託して多き物語をもあらはしたるものなり。老子ハ通ずる處ハ晴をまとすれとも。さまざま老子ハ通ずる處ハ晴をまとすれとも。但老子ハ通ずる處ハ晴をまとすれとも。但老子ハ通ずる處ハ晴をまとすれとも。但

又ハ海辺ニ行テ魚ノ游ヲ見テモ其ヲ取ント思ヒ
テ聖人ハ易ニ於テハ明ニ地中ニ明夷君子以莅衆用晦而明
ノ象ヲ見古ノ聖王晃旒ヲ垂レ黈纊ヲ塞ルモ聰明ヲ
又ヤキ玄ラヒテ兆ヲ見ルトカヤ古ヨリ
倭漢トモニ大智達識ノ人乃至已ニ材智ノ傲ク好ク自ラ
用ヒヲキル処ヲ老子ノ良賈深藏若虚君子盛徳若愚トイヘル
モ是ヲ云ヘリ其ノ故板倉周防ノ京師ヨリ帰リ
参リ時御前ヲ下ノ間ニ已ニ材智ノ人ナレバ色ヘ
ル如ク気奪ヘル如ク彼モ又モテ氣奪ヘル如
造ノ辞ヲ審ニセズ雙方ノ情ヲ知ラザル幸ヒ
ヲ乞ヒテ

ルヲ見テ其ヲ取ント思ヒ又ハ海辺ニ行テ魚ノ游ヲ見テモ其ヲ取ント
ハカリ其ヲ取ヌヤウニハアラヌ聖人ノ心ヲ察スルニ
トヲリ聰断神ノ如ク人ニ異服ヲ用ヒ晦而明ノ如ヲ
實ニ玄ラヒ兆ヲ見ルニ及ハス今ノ世ノ談者作ク
おそらく幸ヒ門弟ノ時ヨリ左袒ヲ要ラヌ
ト幼少ノ如ク思ヒ又ハ門弟ノ者ト云ヒ上ヲ侮リ
ヲ閑談ヲ言ヒ下ヲ御スル者ト云ヒ男女老弱ヲ云ハス我

をおのおのとしていつまでもおくべきにあらず。かといふて家人の家をうばひとりて、おくべきにあらず。元をさくやくをおくべきやうもなし。この聖の甚家をとりたてゝ治術を施すもやはり今日のごとくなるべし。おもふにやくをおくべきやうなし。辞退をゆるさゞるの理なり。父の配分の事を争ひ訴へ、甚若き実の事をとりあげ出すも就人をえらばんや。友衛聴訴の上相手の勝と定まりし

其決着かゝるに下役人より今すこしに
おもひ簿案をくらせざるべからず。とかく争ひの
よきはやく。元をおきて争ひの
なきやうにいたすべきなり。某聴訟の
ときも常に勝ち処て残念なることいまだ
やまず。甚配分のことを某償ひ我過を謝せんと
の金策をなして甚くらせまいとて
己の威勢をたのみ己の過失をおもはず
訴を術とし家をやぶり処て智をとらんと
私なり。誠に古今にためしなき我欲の者と
て此談と考ふべし。燭奇なりとて

運気の工作

さて〻毎いひくるめて月を塾まで厩。家
路まで路持法の道を孔子が同公まで厩。聰明睿智なる「以愚
やの多くまで。毎のおこ「以明を晦く事あり。聰明を十分に
おさまりやすく物事十分まで「以愚をすてて七八分ありておのづから
ふまでまた一号おさまりやすく悔おおく成人
佛作運気なる工作をなく猪一大きなすくなく耳聾を十分
ゆくはおさまるまでもかまわぬ。

をも一口用ゆる十方よき程よおくをも
わさと出さくてもかなふ。さまで耳鼻を去るに
さくすれば第一の口腹をすてゝ第二の蘇頌といひ
あらんと。なるべく思ひ切ある人之飲不喝人之忠以金交也と
人の我為に杯酒を傾ゝて我を篤くせんを人の飲
といふ。人の飲を十方よきに心ある人の飲をも
受れもなく。おもふに。真わるすと云真もなる
也陳の公子完齊の桓公のもあり。親愛せらるゝ

よく飲まゝよ。畫をもおくもよ
ければよく。畫を以て甚畫妹に甚策をよく策飯を辞世。
人の飲をよくさらや也。人の飲
ふ飲やうなれば人の忠をも十方よ頼もれ
よすゝうそうの時必ずうむ聖人曷の桓卦よあり
て。初亢龍よ求をのゝゆきぬ。まて。後悔真と云る
人の忠をよくさらやなり。まて人の飲を
盡さん。人の忠を竭さまて。人
し國家社稷よくいふも甚理屈
よく。國社稷よ。すゝ事よくく

すこぶす本心行そうねとて給わず。芸りそうねぶ。こと
てこのころ我事のよけるもなおけるそしてお
けるそ事あり。始終堪忍を厳みて急よりそをやに
やすくそさそ彼よりそうさそのこと出
事く騒動をなそう。易よ王用三驅失前禽と云な
天子の猟をわを張く一面をお禽
のみをそ取給まそ芸とく改事の
分程みて二ヶ方をおさよ多くくみのも。詩よいたく
彼有不穫稚此有不斂穧彼有遺秉此有滞穗伊寡婦
之利あま田畝の事なそう。周時よそ寛政おとでる遺利お

る事をもちくし。又十方よ五さしく。前嘗て歴史を考る。漢ヶ文帝よ
最儉なる事を称美ヶ二君、ヶ天下穏うて。政事
なよ多く。行ゆきぬ事ヶ二ヶ寛大ヶて。張湯栄
ちそう治ま安うま我。文帝の後武帝よ
孔羊等をもちて。威怒を十方よきなる。貨利を一毫も遺
さ。そよる生霊荼毒し。民心離散て。漢家の危事殆累
卵のよう。仁宗よ後仲宗よ即
て。新法を造ま功利よ趨るそよ朝野騒擾し。民心愁苦
末朝の弱さよ強臣ヶ専ら二君ま英明のうまく

国立国会図書館　タイトル『駿台雑話 5巻』 請求記号 142-54
ガラス使用

ふんしてみるよりもとこそ。材力よ強よ。結構をあとさんやうにて。おなじの道よりもこ。こ驅の法をもちゐるべし。

宋史よ史呂仁宗を贊して、はく。

四十二年之間。吏治若偷惰而任事幾刻之人。刑法似縱弛而決獄多平允之士。國未昌無碌碌而不足以興治。世之體。朝未嘗無一人而不足以勝。其類之氣。君臣上下惻怛之心忠厚之政。所以培植國基者厚矣。

此贊よく仁宗よ朝を推論してその社をあらわせり。乃ち仁宗よ時君よりて聰明よりて寛容よりて。

なお多き。緩よ二驅共倉禽の遺風なるべし。

法令江河のよう

ふるき古人よ人君を貴朝不貴あとこと。明とあとハ

修く緩事心明よ緩事よく度を賢をこと。其もあく

其事おく能よ。生中よおよそ。事よ緩よて

事を賢もつよ。ものおよそ。ものおよそ

さそ。ものよ。ものよ。ものよ。ものよ。ものよ。

緩事よくなる。紙緩のよう。天下のよ。寛大

みてこれのよくなる。溝渠のよくなるべからず。

緩よこのよ。緩ゆるやよ。もよ。深廣

みてあるよるべからず。溝渠をいふにして

去りけるよりけうし陽狭な
牝にさとよりて苦よりて
のおれをきうし溝渠よりもも
うをとらく後漢の郎顗う安帝よ
江河のおうし易避して雑牝とい
とうもさまもさうおきくそ
ようすれとうもわうしもも
頗苛なうを悪むとうすこそ
すまとうし時よりて事みうと
多したうし泰平の世そ民俗極

きすをおこさゞるもの鄭の子產鄭國の政をせしに舊俗の奢を
をなくよきにうつすを車服の驕を禁し田廬の制をさだめ
しかば富人おそれ貧民は禍よりのがれ國内おのづから
邪曲をすてゝ取よりて鄭伍をなせり。
さほ狂よ漢人おもふやう鄭伍を編して
之取我田疇而伍之孰殺子產吾將與之
しかるに子產の曰ふやう侵暴の害除きてハ
亦編して、そく我有子弟子產施之
子產而死誰其嗣之とて、ありひよりて
產を恵ふなるおくし孔子の評にいはく。善政民をあらす

すゝまゆゝすゝこゝかゝる。孔子いはく寛を貴ぶよりも猛する
ときかくおもゝしと。其後政をうつして叔向寛を過むまをとりて
民やゝく寛ふこゝあり。ゆよゝく死すものをすくなし。ありゝ
慢弱ゝして民物て施ものゝよゝく死すゝこゝあり。
ゆゝたゞ孔子のみならず。古よりいにしへの溝渠のをと同うこゝ
物をたゞ古のをを貴ぶ相と寛をもちゝ時よりて
猛をも用ひまし。ゆのゆよ寛則民慢慢則糾之以猛。
猛則民殘殘則施之以寛寛以濟猛猛以濟寛政
是以和をと孔子のををと。一倫をそなふこゝ。

鴟梟のはなし

今し國家の事無く、太平よろこぶべきおりふしやうなれども、又一方に於ては、奇怪千万なる事ども多く、一旦勝をよろこびて、後の禍ひを忘れ、驕奢に長じ、贅沢を競ひ、風俗の日に月に移り変るやうなるは、治世の人の憂ふべきことなり。

今の人鴟梟を畜ひて、その毛を剪り、その爪を截り、その嘴を磨ぎ、その翼を縛して、籠の内に入れ置き、飼ひ馴らして、雀を捕らせ、鼠を殺さするなどは、同じ友なるべきやうなし。

かやうの類ひを見聞きするにつけても、世の風俗の移り変りて、文字かなども多く古へに異なるべきことを思ふ。

古へは、文字はいふに及ばず、詞までも、多く約めて、なるべく短かくいひてなるべく省くやうにありしが、今は、文字はもちろん、詞までも、多く延べて、なるべく長くいふやうになりぬ。

やうに、文字を多く書くやうになりぬ。

ほまた、人に対しても、なるべく丁寧に、なるべく多くの詞を費やすやうになりぬ。

しかるに、近頃、また、世の風俗を見聞きするに、文字は、古へに比べて、なるべく省くやうに、なるべく短かくいふやうになりぬ。

こみよ把窟をそてくもよ〳〵に志ものまゝ
又でなそ〳〵なんそ〳〵て逸くもそうまゝ
訓ぬ人のおもまゝ心ゆきもそ〳〵にくの物
よまゝよそ〳〵に多〳〵おもゆもたなゆや
事ゆそゆおよそ〳〵後仕そるそてあまやてしそ
仕もゝぬまゝおもおゝくおゆうゝ多なそ
ハちそおおも中おを国家の以よそ
也そよそ郭近の人已そ材智をおそ
をお。高次を強れます。作をの代お
よ二そ〳〵善おれまもおまそ。大そうそ逸効をのそ已て遠志

と志き。車の易きなのそ思くゆ従き
のおよさそるまおゝくおゝ。貨財を費〳〵人力を耗〳〵な
うそ。何の甲斐なきまにおうおそ。志のそなのそ
ゆくゝ疫を求め。民おして没を生し
奉競の労日よ長すれ行よ。争そ
家の害を貽そるゆきまわそ。
先代よそ国以来く。天下の耳趣し
北類そ狩くそ〳〵後よまわくそ
はくそを安〳〵多ハ。唐庚存斎の
家の斎超そ常よ民の耳目よ習
不得已よ此

国立国会図書館　タイトル『駿台雑話 5巻』 請求記号 142-54
ガラス使用

さらよりて、後嗣定置て、民心を考ふるうへと、
けれて、其ゆへあれまよそ、但そ一歩みを
ふうて、名ふ祖宗の代よ、世安く、国富、うらさまあ
あよ、さやの数ふ、後嗣の代よ、乱尾倦うさる事
ふみふくこと、祖宗の志をなそ、或ふ改革し、或ふ新
とくそまよ泥て、世のうたけよも、政事
を、其まくさ一生なそ、守をふて、高楽をなしくさいふもて
若改をふりまくき、又なまをふて、考ふ、意ふ、あまをやむ
ふき、宮やく、祖宗ふ、かなふ、かなふ、かなふ、
ふ、ふ、ふ、

ゐるや。爰世よ一種の傖人ありて其
は彼ら名利をうち。閑寂を楽しむ
爰をもうかゞひ。うまく出仕
る艸書をかきつまづくあり。甚傖
仍て伊賀の国へ赴きし。おもひ
園右勝ゟ載て。其時の旅なるも
論らひ笑ふなり。頓逸とたのもし
よく隠者の様をおもひ入れ。さ
栄願し。誦ずとそく出離をそく
そく演奏と沿ふ。なの其見識。

ゟ限られ。此程我家のあるじを東
を施しぬ書。二鏡掌巻物沿なるもの
そのまゝたうてもおもの侭もやく
世共流儀なる片。いせん芸ぶとの
ゟ出ひさらもおゐ。中ゟ伊勢源氏物
弱なる男女中ゟ様して見すのきも
も多ゝ。そのゟ驚伸家ゟ源氏物語を我国此宴と
いれゟ。いかる故とも云られ。定て倭語のものをゆるよん
破してもまゝおもわるすべ。いそのひ
家亟の秋実を云ゟ也。そゟよを世此物沿を佳釈し

蒋

説して毛詩の淫奔の詩を挙て訓戒を垂るなどいふ人の戒世の教とすれども、俗俚よく抄子宮本なるべし。うたとなりては、南八俑」分癈家の幸、雅頌を施遠徳の梓也。風をよく男女各情の詩を里巷に伝へ、嫖姚よろしくて淫奔すれども、邪もおもも。善邪と淫奔すれども、善悪を弁ずるもやまれず。又伊勢源氏の如き、始終よろしくて、必ずしも伊勢源氏無くして叶ふべからず。長恨歌西廂記なども、芸兄長ありて醜悪なる

多地そう。物を聖人垂教の書よりて深く永寛薫蕩を感ずるなり。花月を楽しむ我國秋夜世の荒淫佗をなして、文章備よりて、聴ものを楽しむ家は尚時おろそかなり。拙作も此二場を作高致やの旅おくまも多くの奇怪妄誕の談なり。俳諧歌陋の説にして義理よりて、まて此等第一の拙也。是を世の書物に載する亦作者の罪人情をうつす。又々世よりも猶くの風を移すなおうつ

に安からむ。大なる理(ことわり)ある事なり。
中古(ちゅうこ)、紙鳶(しえん)を揚(あ)げ、弓馬(きゅうば)を習(ならい)、或(あるい)は博奕(ばくえき)を事(こと)とし、或は酒色(しゅしょく)に耽(ふけ)り、或は碁(ご)・将棋(しょうぎ)を翫(もてあそ)び、或は謡(うたい)・舞(まい)を稽古(けいこ)し、或は茶の湯・立花(たてばな)・生花(いけばな)を嗜(たしなむ)人多し。朝(あした)より夕(ゆうべ)まで此(この)事(こと)に心を労(つか)し、争(あらそ)ひ今(いま)の一念(いちねん)に迷(まよ)ひ、百年(ひゃくねん)の後(のち)を思(おも)はず。是(これ)皆(みな)、無常(むじょう)を観(かん)ずる事(こと)なきが故(ゆえ)なり。人(ひと)死(し)して後(のち)、名(な)を残(のこ)さんと思(おも)ふ人(ひと)多(おお)し。是(これ)又(また)、無常を観ずる事なきが故なり。松下禅尼(まつのしたぜんに)の如(ごと)きは、実(じつ)に道(みち)を悟(さと)りたる人(ひと)なり。倹約(けんやく)を守(まも)り、道(みち)を行(おこな)ひ、名(な)を残(のこ)さんと思(おも)ふ心(こころ)なし。是(これ)皆(みな)、無常を観ずるが故なり。
其(その)外(ほか)、仏(ほとけ)も皆(みな)、無常の教(おしえ)なり。聖賢(せいけん)の教(おしえ)も皆(みな)、無常の教なり。仏法(ぶっぽう)を学(まな)ぶ人(ひと)、此(この)理(ことわり)を知(しら)ざるべからず。此(この)理を知(しら)ざれば、仏法を学ぶ事(こと)なし。
かなしひぬべし。さて、人物(じんぶつ)伶俐(とうり)なれども、無常を観ずる事なければ、あるまじき事(こと)をも仕出(しでか)すなり。鉄牛(てつぎゅう)禅師(ぜんじ)の筐中(きょうちゅう)より豹(ひょう)を窺(うかが)ひて一斑(いっぱん)を見(み)るといふも、無常を観ずる事なきが故なり。
諏訪(すわ)なる人(ひと)を初(はじめ)として、得道(とくどう)の聖僧(せいそう)共(ども)を見(み)るに、秋門(しゅうもん)は隣(となり)より来(きた)りしを、お貴様(きさま)と崇(あが)めて、女色(にょしょく)に溺(おぼ)れ、一生(いっしょう)を損(そん)じ、今(いま)は秋門は入牢(にゅうろう)の上(うえ)、汚名(おめい)を残(のこ)して、おしたれて我(わが)ひきても能(よく)も人欲(にんよく)の険(けん)を越(こ)えず。
嗚呼(ああ)、痛(いた)ましき哉(かな)。

みくそ[illegible]ものとのちひあり[illegible]
[illegible]ものと思ひ[illegible]
[illegible]、[illegible]
[illegible]
[illegible]

いくさ[戰]を考へ、そなへ[備]をかたくすべきものやうなれども、投降(なげくだり)の思慮(おもんばかり)なくてもよき人と我ともなきの[野]うへ[上]にあり。戰ひ勝(かち)を得(え)ることなれば、天下の利なり。楚人滯(とどこほ)ることもなく、其識量(そのきりやう)の大きなるまゝ[儘]、楚王(そわう)失弓(しつきう)楚人得(えた)りといふよりも其識量(そのきりやう)一つの大きなるまゝ[儘]、遺恨(いこん)なくして、其行(ゆき)ゆきわたりぬ。其行(ゆき)ゆきわたりぬれば、其ま[儘]ゝ[儘]の事。

渡邊番

おの〳〵時節(じせつ)あり。事舍(すてよ)せよ。各(おの〳〵)其(その)よきをとりて、古(いにしへ)を考(かんがへ)、今(いま)を察(さつ)し、其材識(そのさいしき)を行(おこなひ)ふ人(ひと)をおもふべし。

物(もの)の費(ついえ)始終(しじう)なきやうにおもふ。是(これ)も道理(だうり)のまゝ[儘]也。風俗(ふうぞく)時(とき)の變(へん)ずるを考(かんがへ)、其(その)時(とき)の事實(じじつ)の畧(りやく)を考(かんがへ)ざるべからず。就鎭(なりしづ)公(こう)の時(とき)、人物(じんぶつ)各(おの〳〵)其(その)人(ひと)の云(いひ)ふ所(ところ)を信(しん)じ、忠臣義士(ちうしんぎし)ありても、是(これ)を用(もち)ひ給(たまは)ざりしは、是(これ)非(ひ)ともおもはれざるにはあらず。忠臣義士(ちうしんぎし)ありても、世(よ)を治(をさ)め國(くに)を保(たもつ)ことあたはず。其(その)時(とき)の人(ひと)、其(その)人(ひと)を用(もち)ひざるは、其(その)人(ひと)の罪(つみ)にあらず。其(その)時(とき)の人(ひと)の罪(つみ)なり。其(その)時(とき)の人(ひと)の罪(つみ)とは、其(その)時(とき)の人(ひと)、世(よ)を治(をさ)め國(くに)を保(たもつ)ことを願(ねがは)ざるの罪(つみ)なり。其(その)時(とき)の人(ひと)、世(よ)を治(をさ)め國(くに)を保(たもつ)ことを願(ねがは)

多のかうら家よ。雄よ後世尽子多う芸共法やよろく。
さまく姚筑共去ハ、そ国へ今を渡ぜ一事よ今。
材識暗弱忍ら今ハそいく多ハ。芸子維基浮等ハ
みくく鳥の羽音ハみと後きく教へよみ国の天下の人な
係ハく。も家江巌やハくすして。
なる。姚筑の今佛芸なをやるよ。芸能手多の君ハ
雪壮するもわまも。我共を優柔不決みて材力弱け
き尺。将率ハ運籌決勝共暑なる。さまく上総介忠清の士大将そてハみ一く振舞
なく。上辛ハ先登隔陳の雪
く。雄逸と同一今よみ国

給ふ。きよく、恥を思ふ心さへあるものと、そこにて
渡邊右馬允(わたなべうまのじょう)番ゝまを感じ、後々時渡邊
ある番ゝもとくよりまゐれて
見まもりゐて、後よき事ゝ聞へく、梶原
おもてはらまず、十二ヶ年を経ても、番おくれ
内遠慮もなく、ちかき事共きゝ
行のまゝなりと、かの国さる非(ひ)
あの天下を夜内に奪ひ、仰(あおぎ)頼(たのま)れ給ひ十代遠祖十代
かくの如く、云時張西の任(にん)そく、
番ゝ妹をもらひ、相果て、

ぬよりも彼所(かしこ)氣変りおもしろく、
兼ゝ聞ゆる、番ゝ事ゝ、
さまでも人ゝ右馬殿の(かしこ)
を景周事ゝ、
ゐるゝ、
教ゝ、
やゝ多年の、番多年の、
ゐて、十年ゝ及ぶ、
はやなるも、

国立国会図書館　タイトル『駿台雑話 5巻』　請求記号 142-54
ガラス使用

かくらおこすまで取さくおくれ
とも。おるうちよそのぬすびとなれ
よ。ひとりもとらぬ様なかくしに番人猶
ゟ外の者までハ沙ゆるさゝよし如
わるき時ハ。いかやうにもせよとの
まゝにそすきけく大将
おくなをよにくわ。さまに番をおもくつまれ
さるやうにうけ給ハ大将鳥加藤清正
いくまでも。汝をそくよ所のいかに
ずいくまでハいかゞおさなくつまれ

義さまくしやて。後馬鞍
好くむりひらう。所令を惜よ
さまそく市領よ給ハ。二て
なの人よそ走ほと。焔硝
操沢藻潔(きれい)するまゝ
やく令を争うをさく肩(かた)
志を勢よ附く苟(いやしく)も免るを
そく士との給ハ番うおよ
大佛の銭
さまそも忠清負給うおよ

国立国会図書館　タイトル『駿台雑話 5巻』 請求記号 142-54
ガラス使用

まだゆくに諫するよう有ら共、終に八室衛の幸せく佞る。其外ら数多の壮厚ますおらく諫舎よ同まつ時も。艶女よ就給し。たゞ長酒ばくりまつ時も。其宴よ逸逸ますく丈夫のすくく哉ます。左うるくそまでハくて。この耻すて。父舎よりも大きなる罪悪やくくもたゞの大佛を燬し一事を。自うやまつておそまつく。餘念なく頼朝のおおくも陳謝し。京師よくく法皇よ逸逸てもけまをひおりてなくくも。罪障懺悔の為とて。その悪瞞を恥もず

考せ。近世松永弾正のゆくひたる大佛をやきて。信長の悪事をけ大衆と共ハて。松永こうと君之好義長を殺し。光源院殿をこ殺奉し大逆罪よりくこの人死るぬまなき悪逆ともいへ。鳴呼佛法此人を蠱惑する事何そおくよ。ゆくく寛文の法ごよ。松平飲伊豆守信綱執政の時。金仏をつくく。かく施る処の海よおく。百丈大佛を鋳て後く。天下を利益せるまつてハ。其ものと。其卓識俗と古今よ傑もすくく。御高察創業ハ後文明ハ開きく。かくのごとき人をおそく。宰衛

なるべきこと一つめ。ほろんや
伊豆も吾改るべき事よ。はやく上廊下
国民人質をやめ。大佛を鋳ず鋳ざる
もちまよひ。なく。殉死を禁じ。諸
害を除き。人質をやめらるべきこと。
大佛を鋳ず鋳らるべき。右の
よろこぶべく。但此時伊豆もよく隠居
諸執政のもの。心を明らかにして。
をさとすべし。私の怒なく。吾
吾威令をよく行ふべき。

所持も出ずうつそしきうも已この材智をもて人をなさ
の決己が指揮をとらずとおもひ
威権よりうらん。其行為人を官ずる
爭て言を奏するなり。昔魯
ゆるべく。平易近民。民必歸之
周公此教をおこなはるるもなり
よろしきの事。その作らん聖人の
今もなく古の化のよきなる
うべし。この此教令のきこえもあらん
おく伝造なるべし。世よたし

はなはだ新左衛門という人も、執政府の従事（ずじ）なりしこの疎遠（そえん）なる文飾（ぶんしょく）なきをもて伊豆守の気に入（いり）、諛言（へつらい）をなして、甚為（はなはだ）人望（にんぼう）を失（うしな）う。新左衛門常々（つねづね）諸人（しょにん）を慮（おもんぱか）りて、御家（おいえ）を投棄（なげすて）するごとく伊豆守に諫言（かんげん）せしかども、伊豆守聞入（ききいれ）ず。終（つい）に塵芥（ちりあくた）のごとく新左衛門を捨（すて）給（たま）いぬ。新左衛門常々（つねづね）諸人（しょにん）を慮（おもんぱか）りて、御家（おいえ）を投棄（なげすて）するごとく伊豆守に諫言（かんげん）せしかども、伊豆守聞入（ききいれ）ず。終（つい）に塵芥（ちりあくた）のごとく新左衛門を捨（すて）給（たま）いぬ。新左衛門常々（つねづね）諸人（しょにん）を慮（おもんぱか）りて、御家（おいえ）を投棄（なげすて）するごとく伊豆守に諫言（かんげん）せしかども、伊豆守聞入（ききいれ）ず。終（つい）に塵芥（ちりあくた）のごとく新左衛門を捨（すて）給（たま）いぬ。

の、ごとくなり。我（われ）おもうに貴妃（きひ）を愛（あい）し給（たま）いて、あまりに寵愛（ちょうあい）あまりありて、かくのごとくなりしか。伊豆守（いずのかみ）なども、あまりに寵愛（ちょうあい）ありて、かくのごとくなりしか。昔唐（むかしとう）の玄宗（げんそう）方士（ほうし）を命（めい）じて楊貴妃（ようきひ）のありどころを尋（たず）ねしに、方士蓬萊（ほうらい）宮（きゅう）にありと告（つげ）しとぞ。貴妃（きひ）もまた、玄宗（げんそう）を慕（したい）給（たま）いしとぞ。伊豆守（いずのかみ）なども、あまりに寵愛（ちょうあい）ありて、かくのごとくなりしか。

国立国会図書館　タイトル『駿台雑話 5巻』 請求記号 142-54　　ガラス使用

志ざしかくいふまでもなく申迄もなき事ながら
を継ぎ給ひしかば。業平の簪をおのが方へ
念をいれてもち給ふべきのよしいひ入れ
そ後おとゝひのごとく一度ならず二度三度
おもむく伊左衛門奉命て赴きしに不日に賊ども仕舞て
いづくへ逃失せしや逃去りし跡形もなし
主婦共両人おのおの追号して葬礼
なれば伊左衛門も立帰りぬ。新左衛門も立帰りぬ
御家よろこび給ふ事しばらくやまず。今
おわりぬ。次おのおの退散す。

賊を追ひ退けし事。伊左衛門が働き。

若おもふに。彼候一度ニ賊塁へ向ひ
おしよせ時は。其ひまに本陣より錦を擁護
よ沈まば兵おのおの乱れ今や討ん
けれども某おもふやう。今おめおめと賊
下ゝく要害へ籠らば。我兵を擁護
本を取よせ。我側より重ねて又おめよせ
なり。鉄砲やうのものもなく
籠を地へおろさせ。おのおの手ニ
徒跣にて。ひらりと飛下り。籠を合せおのおの肩ニ
擁護して行よし。

おもふ人さくなり。爭かよく攻治(をさめ)て攻治(をさまる)ことを。其時の
はやりやすきに方(まか)せ。重葉言(かさねことば)なる物語(ものがたり)をうけ
てはやすは。あやまちの本(もと)也。伊豆守(いづのかみ)重(しげ)矩(のり)公(こう)
よき物語(ものがたり)をもとめ。伊豆守(いづのかみ)の云(いふ)ことをすくなく
そまゝに多く今馬(いまうま)おほよそ御(ご)意(い)に入(いる)ことを
よろこぶ折柄(おりから)。常人(つねひと)なら只(ただ)はい〳〵と
ひかへ居(をる)まもなく。我(わが)おもふ所(ところ)を
のべん。拇人(ぼくじん)震生(しんせい)外中(ほかなか)よりも。いかゞ
もあらんとおもひ。伊豆守(いづのかみ)にすゝめ。登営(とうえい)
の大きなるも。古今(ここん)其例(そのれい)なきを以(もつて)。世(よ)古今(ここん)其例(そのれい)
とそゆるそう。其(その)ことくさ〳〵世(よ)の指南(しなん)ほこと。遺憾(いかん)
傍人(はたのひと)の働(はたらき)馬援(ばえん)いふ井底(せいてい)の蛙(かはづ)也。嗚呼(ああ)
泰時(やすとき)の志(こゝろざし)
他日(たじつ)後(のち)の今(いま)よ。諸(もろ)〳〵の人物(じんぶつ)其(その)任(にん)に係(かゝり)
てゐん。縁(えん)なき人(ひと)物(もの)多(おほ)きまよ。只(ただ)あるに及(およ)ん。
其中(そのうち)よ。其(その)名(な)を知(しら)ぬ人(ひと)も。能(よく)〳〵見(み)れば。
治世(よをおさむる)の治(をさまる)よ。小條泰時(こでうやすとき)に類(るい)なる。
うん〳〵ぬ人(ひと)も。此(この)間(あひだ)よ。
梅尾(うめのを)の明慧(みやうえ)よ。某(それがし)不肖(ふせう)なれども。
那下(なんぢ)よ。隠(かく)さず。

まつよの慧あるを以て、泰時のさしもく
某をも召出されぬ。那下の中もくに
なれよ明慧ゆへ用ひけるにて御
あやまりもなく泰時ゆく信じて、父義時死去の時財
寶大くに備ありて配分して。其分ハ
きけれど。二位殿尼泰時より自分の
まゝくにまつよ。事を裁判せられ
もかくにて、弟とも扶持おもひ
しに二位の尼も感服及ぶまつて
族粛穆し。鎌倉中も感服し老
若男女明慧浮屠ぞと

そも孔子の季康子への給ひし苟子之不欲雖賞之不竊
やくもの一つ。泰時の明慧の一ツを
治むるに聖人の言徒ならざる事を信用して緑金よく
も多くあらざりしかば泰時家督後
おとゝよりくに聽へ出くに私欲を
勢を治むるに依て兼譲あつて争を分
ち訟を聽くまゝ明断ありしと雖
る老儒の治るをきらひしに泰時ある時訟をきゝまつよ雖
決しけるが、まよ其一方より相手を
うやまひよくよく考へ及ひなをも

くまおの地を受給ひて、すでに十年の後、元中の春、時感じて、汁を争ひ、決断すること、仮某今と多く、此の如くなるを以て、其の服するところの地へ、そのまま、きとく。別に恩賞を行はるべきの沙汰なく、加産も曾てなかりしかば、ゆゑん古き物語よろしくあらんと、古き賞、芸辞を重ずるを以て、なり。泰時公の如くして、会稽の恥を雪ぎ、又恩威ならびに行はれ、よき後嗣よろしく、時頼時宗、代々

傲慢なる、改まらず、こと、ハなはだ小像氏皇胡の陪臣をもつて、安きを貪るに、泰時此功といふべし。世の時頼を泰時の賢明するに、仮を脱屣よろしく、深慮よりて、高人のごとく、其宗廟社稷の重きを負ひ、佛まで逃ず、傲行を楽とするまでやわらぐ、君徒を穢し、体を失ふに、人を以てすることを小みて、を大に昧きこと、泰時の如くなるべし。

人よおもふ氏其外縁会氏の人物を考るに。よくそろひ
多き人なるゆへ。但建国のころ
集まりおほき血気勇悍の人ども
皆降灌ころ〻みくれ。其中より名誉
壮士といへどもおほくは。志操潔白みて。きわめて堅
の人也。世よ和ぬく。並ぶものなき。志操
し時。折ふし文をとりく陳謝せよ
後の今文折ふし多く考へなをし
朝も親とのこされ梶原も怒をとき忠信
よりて感学すれまなをとりく

楠正成そよそ輿論のあつまるところ。其人の大小をいはず。英房を卿輔弼の任あるをもて。正成其材あるをしり。英房好て来るにあらず。英房孫馬を練るを直言極諫朝廷を傍若無人の風鳴といふ。如きこと。正成歿後の功を世をのこさんこと。英房を一練兵後園をさそひ世をのがれ。園死するのことわり。其時正成忠義代々あつき他人にあらざれば。尚時推の心服くにたるべき人なれば。英房も其志を感じ。正成歿後。世よ倚るところなきを以て。その為人を感じ。楠家の遺書をうけ。きまじく流布する地あるをおもひ

後人の偽作なども。一味をそこなはんを以て。其まゝを書もて。参考の処。量のあるべき歟を思ひたるうへ。一義の正名ある男士なれども。時勢に附く反復を常とし。剰へ楠家の孫累累こうこう遺訓をはなれ。一門風族心を壹にして一力を戮せ。名分をとくに報ぜず。二代の君一人を戴心あれまをきこえ。古今比類なきをもて。正成徒澤深厚ありて。なるべく人をすゝめ人推ざるに法葛孔明よりも兵略を

そも〳〵異後主謀ら、父子同く死するも同く後世に死名を遺さゞるを得ざるなり。孔明も此辺を知らざるまでもなきに、功名を遺すの心盧より生じ、蜀の先主の三顧に感じ過ぐて不得已して出仕へしより、関羽・張飛のごとく、君臣楽みのおもむきを失ひ、お処伊呂にもまさりなんと古人の論もあるべし。諸葛ハ元来功名利欲の人なり。

後醍醐帝笠置に隆幸の時、もし進て奈良おの〳〵が処置のごとくあらば、元弘の業なるべし。帝位後の後も尊氏義貞の如く列して、なるよう任用せらるゝまゝにいたり、正成

おもしに甚兵を用ひ、孔明を宮中にありて制の兵をいつゝ〳〵、筆をとりて論ずるごとくに、韓信を用ひ韓信ハ似ざるを、項王の易制を思ひ、正成河内の易弱を思ふべし。韓信ごとく兼備の将にて甚兵を恐るゝまでもなく、後醍醐帝を擁して、衆を統合し強きを将て甚強きを用て取勝ち掌握のおもむき、後世の嚢沙背

水敵を破ること必勝を期す偶敵を慮することなし故人の兵を用るあと一轍より出ることなし韓信の材を敏速よくして攻ること其の材八将軍に勇くよくする攻ることよくするそれ攻ることよくするは乃ち韓信の兵を増をもちしめ兵よく敵を攻しめ兵よく韓信のごとくなるを殊にこと決せる而も高祖と東垓の会あり。正成の兵を利器共利よくして忠義のごとくして国家を思ふ甚底績なきがごとくして同一にこれなり。此の人乃ち後人の及ぶべからざる所なり。

今劉山のあるを以て南朝の明主と號すれ和あるその中主を心服せざるなり。正成常よりこの天下よく戦功を立るまゝを孫呉共の兵を孫呉よりよくして孫呉の兵よりよくするを得ざるとして。それ今よりこの民あるまゝを立てよく。聖賢の道を学ぶして。但心服なきのごとく絶倫の材をもつて。漢川よく自殺するとく。実に季と最後此一念を落すまゝ西し。

足利家の亡きを足利一統の後幕下此人物よく。細川頼之をして世よく良

相ひ称へ給ひしと。君もまた令をうけ功を輔けよと奉しかば御ともろともに力をあはせ小牧・長久手の戦ひを初めとして君威を強くするまでを志して、宗家義弘・義久の弱きに乗じ、島津家久・義弘・忠恒父子を降参せしめ、また義久の子忠辰を質とし、その驕奢をきはめ僭逆を肆にするに及んで、これを誅し、衆をのうんぬん。また

さまた應仁の後ら利家代を弥うおく。前後而もみら。
其名ある者士。寒促飛藻こ徒よわらさる。貴有勲舎こう
類なるく。ゆく賢愚得失と論する及ら。従孫今あと
称共ば。右内道潅て共。名ある共ら。如もあるく。
上杉ら山内扇谷古堂ら共ら山内を宗家ともこと。
け時越後の上杉房顕山内の家城後く。共ら顕定と及こと。
道潅ら其父道真よら扇谷の上杉定正の家花ら共。
定正ら子ら顕定や嫡庶の義を猶く。軟強共なる
篤こて。扇谷ら家ら輔相ら共こ宜
もわろへ者を支く強をそそくし山内の控を奪ひ。こ上杉ら

和よなるとけれ行よ。終よ兵乱を招く。宝ら用く題定
う落よこ後さる多ら。悪こ共材を庶こ分を保つ
よ多ら古ら如よ後ら。志ら。戦国ら武士ら
所ら文学よ志さこ倭歌を詠ら如ら乱世ら悟ら。
考人ら多こ。歌ら詠ら。詩ら作こ感ずら。世よ後ら
う後時さ我今共ら多ら歌を世中ら花潅
敵よ後さ時ら歌よ後ら。此歌を世中ら花潅
景集やく後ら多こ。さよくあ。慕
よ此歌ら多く哀紹書よ。康正ら年ら冬藤沢ら後よ。
多き味方ら入ま。二日ら

まことの武士ぞと感じ入りて、わが小像を憲冬（のりふゆ）のぬりたる自賛（じさん）とともに、かの武士に与えおくるとて、作者をもわが名をもいうことなくして死するも、侍の時、義のためには命も惜しまぬ心ざしの、あっぱれ男わざよ。浦方八中村治右衛門、お浦坂東雲頼母（うらばんどうくもらいも）などいう人の世よにあるほどまでは、座形（ざぎょう）の技持せらるまじく侍るよし、かの敵の男も栗毛の駄（だ）を乗（のり）ぬき、二ツ引（ひき）よせ、先（まず）彼の役者をうちとりたる上にて、かの小像を見るに、いかにも似たる姿なりとて、敵の男もおどろき、感じ入りて、うやうやしく拝をなせしとぞ。月の雲間をいでたるごとく、中村をはじめ、我陣よりも、ほめそやしたるとぞ。

なんぼう侍とはいえ、よくも壮年の時分、たけなわの血気盛んの折柄にして、きものばかりおとるまじきものを。おそるるもいやはや。中村主税（ちから）のやさし業（わざ）、歌舞伎役者のごとくなるにはあらねども、男ぶりのよきにもあらず、その上、貧乏侍とて、義のためには命も惜しまぬ心ざしの、あっぱれ男わざよ。

なのみならず、敵をも感じ入らせたるは、なおなおあっぱれ武士ぞと感じ入りて、わが小像を憲冬のぬりたる自賛とともに、かの武士に与えおくるとて、作者をもわが名をもいうことなくして死するも、侍の時、義のためには命も惜しまぬ心ざしの、あっぱれ男わざよ。浦方八中村治右衛門、お浦坂東雲頼母などいう人の世よにあるほどまでは、座形の技持せらるまじく侍るよし、かの敵の男も栗毛の駄を乗ぬき、二ツ引よせ、先彼の役者をうちとりたる上にて、かの小像を見るに、いかにも似たる姿なりとて、敵の男もおどろき、感じ入りて、うやうやしく拝をなせしとぞ。月の雲間をいでたるごとく、中村をはじめ、我陣よりも、ほめそやしたるとぞ。

国立国会図書館　タイトル『駿台雑話 5巻』 請求記号 142-54
ガラス使用

衆えとくよ。其志勇々よ義をおもんずるよわよ。首を刎ら
るゝとも義を失はじこそよ。必ず
死つゝ。我多年武士の心よ。其
志戦場よ死を怕んずればよわよ。首とらるゝとも少しも恨
せずやよ。おれ一ツ多々よ義をもちこれおよて考へ。され
ども世の中一ツもよ心よまかせず。敵
も味方も死ー多れも、きたなくさ
やさー我もやうつゝ。
武田信繁

多よ是利気の季世天文永禄の乱よおよ。甲州武田信玄の実弟典厩武田信繁そもやの。始よを
代武功せのゝ尚ひく。他行をよ
ゝまでも信繁共供をまく世よ考る人なし。今多のわ
死たさすしてよ他ゝ死よ
繁をもして信玄を慶するゝ
しよ。能ゝ、こまでも信玄の義よ長ー多るをもとく。信虎
をすてゝ信玄よ与し哉ー。信玄那呂と謀く。信虎をすて
おゝて完と罷きー程よ。信虎甲州へ
武真ゝ不征又多るよやうよ。後ゝよ奔して今川義元寄

国立国会図書館　タイトル『駿台雑話 5巻』 請求記号 142-54
ガラス使用

ひとなるべく。年を経ても。信玄はのよく父をもよく国よく治めて。一生をおえん給ふ。信虎流浪して。繁信虎の為にて。信玄を廃して信繁をたてんとすれども。ついに信玄も初めより。まつ国のおもよく信玄はつゐに追放する程の人なれば。義元も危難の場なれば。父信虎の伝繁始終の為よ慮外の事ありとも。信玄はつゐに完全の君となり。子孫も連綿として。後漢の東海王強も光武のおとなりまして。廃せらるゝ事なく。子孫安寧にて。

けれども。其後の事は代々物語にて。委敷事ハ茶請よりて。よく奉行の事ハ。其外の事ハ。略す。

一。今川義元公。桶狭間にて。信長の為に討死せられし。其後。義元の嫡子氏真。駿遠両国を領して。国政を執行ひしが。元来。文事を好みて。武事を嫌ひ。日夜。和歌蹴鞠を事として。国政を怠りしかば。家臣の心も。自然と。主君を軽しめ。内外共に。人望を失ひしかば。

川中島の合戦に。討死せられし。信玄一生の危きおほき事。此度の合戦を。第一の危きおほき事と。信玄常々物語せられしとなり。

国立国会図書館　タイトル『駿台雑話 5巻』 請求記号 142-54
ガラス使用

ちゝ・おや病よく討死せらるゝまで
く・其ほを傳らまつ一條子こゝに
敬篤實なてとよお附さらるもなか
野やまなと駈まも海となるとも
こんあるくこゝ氏といふ・又一事
も・後度くおやまつこゝ氏といふ・又
なの御よ及ち・同よ多ねまつ
おくまもね・信繁人こゝ恭
おと叢心やく・こゝと初やも汚
人よ恥さらく・又一事よ合義よ・逃くは・敵ち・こゝなら人

敵を急よおくこゝたゝまつ
勇おやく・ち・おく信玄御陣より
威光器やく・軍後ゝまゝし・是
やゝ・ゆゝまを走まる・ち・ち・ち
やゝ・ゆ人の多ちをいやく・
さやゆ人を多く世よと・陰
う滅さらる・ち・こゝよ命時剛慢の勝頼よ信
信玄死してく程なく織田氏より多ち後ゆまゝよ哉・
なのみう・貴まおらる也・
長沢のち
後日譚ち本會けれよ・倒の譯をく・翁ち・各月比

我国流の兵法を修せらるゝよし。信玄
等敵をうつの法人数をおほく用ひ
かく狩きまのやうなるまたゝ用兵の要を得ざる
ゆゑ毎度利を得ず。皆要のまもりを
もしらざるゆゑなり。此序よ兵法のまもり
孫呉子等の兵書を考へ見るよ兵術の要
おぼし。十三篇の要を軍形兵勢の二
兵のはなし抔の物ごとくよく常住おこたら
は。軍形を軍共云ふ文を軍のことやく
のきをしめす抔兵術をいふ。軍形を引
て。兵勢と合戦のはなし。軍形を引師の法をいふ。今僅
百をこゆる人数をもつて足軽
やこうねやをう。はつく三軍共師をおく
をうまもらざる。こゝく自由よりくる
よう割(わり)て。軍伍(ぐん)をきめ。各方を守
のまもり方あをのうよく人数を一ところ
三軍ともやうよりて。その共造作なくあるべし。
弱(よわ)くならぬやうにせらるゝあり。又兵勢と合戦の法とい
常の狩きまもりをもつて考へ給へ。急(きう)なる
きは度(ど)を失(うしな)ふもの。はつく合戦の務(つとめ)を呼吸(こきう)のうよ

おそるべき強生の勇猛の士卒の勇猛の勢にて猶豫（ゆうよ）する事なく、勇気凛々（りんりん）として、おそるべき強生の勇猛の士卒を撃（うち）ほろぼし、すでに勝利を得（え）んとする時、勇猛の勢にて猶豫する事なく、勇気凛々として、おそるべき強生の勇猛の士卒を撃ほろぼし、すでに勝利を得んとする時、

て勇猛の勢よりおそるべき強弱の形をあらわすなり。兵勢を軍形よりして、強弱の形をあらわすなり。兵勢を軍形よりして、

まなり。士卒勇猛なりといえども必敗軍をなすなり。兵勢を軍形よりして、まなり。士卒勇猛なりといえども必敗軍をなすなり。兵勢を軍形よりして、

軍形よりして、強弱の形をあらわすなり。但軍形をもって勇猛の勢をおこすなり。兵勢を軍形よりして、強弱の形をあらわすなり。但軍形をもって勇猛の勢をおこすなり。兵勢を軍形よりして、

国立国会図書館　タイトル『駿台雑話 5巻』 請求記号 142-54
ガラス使用

ことをおそきゆゑ
おそきをせめ
ことをはやくし
おそきをせめ
士卒をいたはり
其人数をあつめ
下知をまもらせ
孫子のごとく
激水之疾至於漂石者勢也
のごとき疾至於毀折者節也
放善戦者其勢険其節短勢如彍
弩節如発機やすきをもつて
下知をまもらせ
金鼓のおとを
ちくわをおとし
おめきさけび
ときをつくり
八方をおさへ
我弱きところを
責ること
鷹鸇の
翅をうち

ふるにのりて
急にせまる
ごとく
おめきさけび
ときをつくり
敵をおそれ
老士卒必険しく
ときをつくり
一毫も軍法を
敗ることなく
独ものなきを
我務とし
ゆるくして
急ならず
物ごとの
勢独り
士卒
倦怠
必勝利を
ものにせんと
忽急なるものと
なすべからず
其如発機
ときをつくり

なり。孫子の善く勢を論じて善く戦者求之於勢、不責於人、故能擇人而任勢。任勢者其用人也如轉木石。木石之性、安則靜、危則動、方則止、圓則行。故善戦人之勢、如轉圓石於千仞之山者勢也。孫武の言ふ所、一字一句も兵を用ひ敵を料るの要ならざるなし。孫武を謀るは兵家の征なり。

孫臏韓信の兵法、其書あるを聞かず。孫武の兵法、其書あるを聞かず。

の将兵鋭卒必ず竭し。老弱運漕して内を罷るるを謀
るべし。趙より魏を攻めんよりも。先ず魏を大梁より趨くに虚
を衝んや。趙之を走らば。かえって我国危きを救い。必趙をすくて
ゆく自救む。走らざれば。趙の国亡ぶるを一挙にして。趙の国亡ぶるを
なるべし。その弊を魏より収むるやうなるべし。走らば。魏即果して趙を捨
て。うけ。魏即果して趙を捨
ちよ勝利を得るをまち。おもむろに趙を救ひやうに。趙を救ふべし。
又走らずして。魏を攻る形をもて。虚よりすれ急
を迫の勢をとらば。退るべし。これ。魏即ち趙をすてゝ帰
路さら幸を得ん。よろしく我。よろしく我

無事(ぶじ)のよし悍雪(かんせつ)みて齊を怯(おびやか)よとて。兵を敵の勢(いきおい)よきに。その機(き)よく利導(りどう)して。己(おのれ)が圖(はかりごと)り行(おこな)ふ趣(おもむき)。兵法(へいほう)の利者(りしゃ)歟(か)と將(しょう)とこそ。魏(ぎ)と謀(はかり)しめて。而(しかして)利(り)よく。百(ひゃく)齊師(せいし)魏(ぎ)の境(さかい)よく。將(しょう)一舍(いっしゃ)する日々十万竈(かまど)なるその數(かず)日々(ひび)減(げん)して。軍(ぐん)の踵(あと)よ遺(のこ)しけるよ。さる程(ほど)よ龐消齊師(ほうしょうせいし)の後(あと)よ追(たつ)よくもやはあらん。そもそも兵(へい)ハ。我(われ)よくよ齊師(せいし)法(ほう)きまをも。ハ。ことなる吾地(わがち)よ入(いり)て。士卒(しそつ)ハ。十(じゅう)に八(はち)九(く)まで逃(にげ)ぬるもの暁(さと)よるまよなるよ。

さるよ追(おっ)ぬやくく。吾(われ)ハ。二日(ふつか)の道(みち)を一日(いちにち)よ行(ゆく)ものよ。孫臏(そんぴん)吾(われ)を庞涓(ほうけん)を馬陵(ばりょう)よ擒(とりこ)よせしよ。る陵(りょう)ハ。吾(われ)よくよ。庞涓(ほうけん)を付(つけ)ん。大樹(たいじゅ)を削(けず)り白(しろ)く。龐消(ほうしょう)ハ。大樹(たいじゅ)よ死(しね)よと大書(たいしょ)しるしおきて。吾(われ)を射(い)るものを。すまじ。万弩(まんど)を夾(はさ)くよ伏(ふせ)くおきて。吾(われ)を待(まち)くよ。暮(くれ)るよ及(およん)ぬるを。万弩(まんど)一発(いっぱつ)よおらまて。吾(われ)ハ。未(いまだ)暮(くれ)ぬるよ。大樹(たいじゅ)よ書(しょ)ける字(じ)よ。火(ひ)を燭(とも)して。ハ。読(よみ)ぬるよ。吾(われ)ハ。未(いまだ)害(がい)よ。ハ。あたらず。ハ。ぬるよ。吾(われ)ハ。未(いまだ)書(しょ)をよみくく。ハ。ぬるよ。吾(われ)ハ。未畢(いまだおわら)ざるよ。万弩(まんど)

倭よおこつて、一ハ、魏呉ちよ破もつて、龐涓自刎(くびきる)して、孫臏賢(しもべ)となつて、死よ免れ、龐涓の業よ孫臏を見ぬ先ハ、人のそをきらふ事なかつた者をきらふ事なり、孫子の戒之出(いづる)乎爾者反乎爾者也(えんじやいものハかへるものなり)との教ひ、よく考へ見るべし。聖賢の云、法ハ有ても行ハるゝ事も小人の戒やすく、なり。わるきよハ、きらハ、なり。

前ハ、敵を形よ出さゝるやうなり。敵必道を信じて、ゆき、術を以て、敵を欺よ、又ハ、敵を疑よ、方々よ奇兵備よ置ハ、敵自刎して死ぬ一也。敵を撃よの法なり。よく敵を料る事、孫武の教ハ、こゝ、わるく考。孫武後人やすく、実漢の初よも、韓信、おゝく兵術よ精しく、合戦のよつて、攻ル時、背ろの陣よ、よく備ハ、今よおよぶもの一世よ稀なり。信ハ、右ニ背山陵(せやまおかをうしろにし)、前ニ水田(みづたを)ハ、左ニ沢(さわ)ハ、なり。此軍法の考よ、敵よ向ふ、変化ある、軍ハ、

も常敵やうも見ゆ。此時趙兵二十万と號す。漢兵無勢なるゆゑ。甚こゝろおのゝく決死の戦ひをなす。韓信あまよよ下くゝゐるをもしさゝく陣せ〳〵わるをも。水を背きて陣すれバ死地なり。一ぢく迫り討ハるゝ。おのゝく死を決して戦ハゞ趙軍潰の軍ハ死地を陥るを見ゝ必なゝ井用をなさゞ。我死我の所をもて物を争ひ。すゝ争ふ。我死我の所をもて物を争ふ。必一戦よ勝利を得ゝ。其時その陣を捨まさるをゝ。趙軍其勢を奪ひ。自ら敗走せん。敵も

ゝまを不見ゝく走ゝ。漢兵敵もこゝろを折よ。そのゆゑ勢よのせゝまゝく。こゝは計ハ方をもさるゝ。敵をして空壁（なきがごとき）逐利（りをおハ）しめ。多ゝ趙軍其勢を奪ひ（うば）。敵を敗よたと。して。自ら勢をさゝく（ハせ）驅（かけ）。敵こゝろを折ゝ死を期すゝ。孫臏の兵よ勝ゝ。韓信の兵よ敗ゝ。古今の兵法

をとゝく孫武の書よく考るに終竟を全せてうこのおとゝ
なりて長ずるにつゝく敗事よりおほきを畏孫子
すや。是為不可勝以待敵之可勝やそ。是全敗の
事也。敵之可勝を敵よわよ。必勝不失乃
勝なり。其様を察よといふ其戦を勝よ決を其
ありしなをくゝ。淵のおとくゝ。知よくゝ潜まかくゝ。
ゆゑ蔵於九地之下といふの也。其義を勝よ決するよ而
颯のおとくゝ撃。ごとき勤於九天之上
といふの也。急のごとくゝ急おとくゝ。急のごとくゝ急
ゑ。急の急おとくゝ急ゑ。急心相生ゝ。虚実相形
ゑ。急の兵端のおとくゝ。兵術のおとくゝまやかよ

ゑきまやかよ。他其勢要を、ゝく。兵を神生おとくゝ。其形象
ゑ。其形象のごとくゝ。軍政兵権も、ゝきものやよおつ
更へき。孫子も兵厭速。未覩巧之久也といふ。其将兵
者を多く敗事よ的うみゝて。其行陣整の整よあつゝくゝ
まもなくゝ。網なきをとくゝ。及ゝ勝利を得る事
速也。そもゝ拘束をとくゝ。兵家の中ゝ最也。若勝整の数よ
暗くゝて。多く毛言を用給ふ。号令を煩雑ゝて。すきよおなく兄
きておる処対をすを。軍法用趣ゝて。すきよおなく兄
ゆきまやかよ。兵ゝ事を。公文すを程よ。整ゝ数字よ多ふ

共分を納めく國滅ぼす義多し。豊臣秀吉公よりこの方にて。諸暴止ん丸の名ばかりなるは。只お師よりの沽券もなく。義とやらも只必功を一発するよりぬし。遂よ長き頓く蹟日恐ろしき記信玄のごとくなるものよりて。礼楽慈悲八苦もさらさら行よ。晩黄巾名の師を起して。胡鮮を伝代し。くく人民を奠肉せしこれ。天下の人ん離叛きうて。末路を暴露し。多くの人民を奠肉せしこれ。天下の人ん離叛きうて。末路を暴露し。多て收ちするの禍やすし。孫武一言。長の要者をおろそ

やうのけ。書ら多く財を蓄しく人を殺しやすく國妻よ害を駄さをこととすくなるこれ。むろく蜀の先ろ自ねるくて呉を攻る時。七百言を連ぬこと十屯をとるて。呉や相拒みとす年よる巧而久くというも。法あるよ長殿意迫く。陸遜こゝみよ称ちまてこと。我知やすく。もと代上於我国の去虎争雄しこゝ。こゝまも伝法疎のやうなるおろ。軍令粋くこゝろそろおろ。ば。おとも先為不等揚て敵の可撃を打まをもこれ。ま一我のろよ揚ことをはとをく。高兵ほく相攻るまま年をへく。やう兵。ろ又巧るろとこゝろも。遂よなる共敗功やうして。僅よ

りくだり、
長を統道
他日孫子、敵の軍令をうかゞひ形勢の校をはかり、
かつ事を感服し給ふ。世よ長注を作る人も一なりと云へり。
大なる上杉氏甲斐の流をくみ、長の方実戦中を精しく
ふるまひ、もつぱら形勢をうかゞひ敵を制するをおもとし、
結ぶに義の深きを以てし、世よ作る人の本意
とす。長尺とするところ是なり。但形勢を審かにし、
智謀をもつぱらにするは、仁義の長よりおもかるべきよし。聖賢の

道中をすゝめつゝ、ひそかに其人物をうかゞひ、
て、そこをよく長ふ事をえらび、長を配せしめ、
柱道をもつぱらにするも、又仁義を制する根源なりて、
その別派のまゝにおく。かの甲
ひさき道中をうかゞひ、古人今長乃是なるまを
法を作りし也。戦国策料敵制勝の術と長とを兼ぬ。え
事甲冑武士を長と云尺。長を士卒ともに
古今の長を論じて、次に湯武の仁義、桓文尤の制、秦の
鋭士、魏の勇卒、齊の技撃をなす。
よく此三を明らかに知せて、仁義を当となし、二軍を用ひる力を戦せて、

秦之鋭士を率ゐ。屯々優々として。一切よく其力を養ひ。魏の兵と雖ども。一朝これと戦ふ時は。必ず其鋒を摧くものなり。是を仁義の兵といふ。恒文の兵も。信義を以て。律令よく行はれ。一人も其義を踰ゆるものなく。一人も其罰を脱るゝものなし。是を仁義の兵といふ。嬴秦の兵も。厳刑重罰を以て。士卒を駆励して。勇敢ならしめ。魏齊の兵よりは。其強きこと。百倍せり。然ども。魏の兵と戦ふ時は。必ず其鋒を摧かれ。魏の兵よりは。其優ること

宋の時、ぼくとの我よこのおもて一將ぼくて敵よ圍まるゝよ。
炎天のまゝみぐるゝ行ゝ敵ぢそ
寒く城を固く兵をおさへ、一人も胄をきせず、甲たく
せざるゝ時を窺ひて寄たのゝごとくせよ。兵人惰
かゝりけれ時よ。敵もさすが困まんと量ひて
出るを待。敵一おもてもゝてゝ敗軍ゝ
じまを宋よ兵を論するおゝ
き事なゝ作らまゝ。諸おゝ
ハ孔子も二軍をりそ源事而懼好謀而成者よくゝ
せんとの語ゝ兵剛のまゝハ兵を行ゝ

の世よなるゝよ。天下攻伐をせめく。戦争やむ
なうゝ。建武ゝ年宮方義兵をゝく。
まく。四年合戦ゝ及ゝ。ぼくも法師武合の兵を
おもむく。衆の多寡をゝらく兵の強弱を争ひ。ある時
策よりも。主軍よ世令をゝ相撲角力の場ゝ
務負を決するがなゝ。或ゝ負る時
おゝ。勝ゝ負ゝ一ゝ此まゝ
ゝてゝぬおゝ兵法ゝ論ゝ
の雪辱ともゝ。只利氏の季世よ
雪ゝ割據ゝて。兵を磨士を
ゝ。四ゝ術ゝ

ひくに於ては兵勢分かちて百戦
ともいふべきまで中々我国と校
ぶるに暇あるまじ律をくすべ
るべくさまで八ケ敷事にもよる
すくうべきまでも而代兵衆者
兵体を作るのみにて兵法のよ
を制するの謀なおとつまりまを
くらき人にて兵の擒にて国
所をとるある。先年人のいひし
よし兵者詭道也とあるとよりし

兵を詭道なりとハよむべくこれ
きそも兵を偏道といふを始く兵
はもとより、たくらみ道なりといふ
の二字と倭訓同一なるも字義よ
ろしく常格をもつて詭道とそいふ
孫子も能而示之不能用而示之
ようすべて乃ち敵を料て勝をを制
すべきよりとまもとより兵法
いもずべて詐偽の道なりといふ
せば詭遇にて捷拿のみなりやそ

おくるよし。依て近年の初より
ハ。それ〳〵おもしろく。流通やまず。ハ。近年ハ。近通やまず。ハ。近通やまず。
家を治るの方とすべき。況や当代の兵家ハ相伝ふるハ兵
の事ハかりなれバ。或ハ棋を学ぶ。或ハ古戦
法を会得するハ。孫子の書を学ぶ。八陣なり。た
だ〳〵よく〳〵おもくべし。文字よりハ。武義
をきくべし。ほとんどハ孫子のみきゝやさらなり
すべき兵法をハ。多くハ臆見より出。よく相違ハ
云知ハ有間敷ハ。
不忘初君

後数日おもて沽券来会せしこと。前
事を取ゆくよし。自方ハ先日兵の指述をきゝ
ハ。ハなはだ不調にて。進むるよりハ。限を太く
るゆく仕方よきやうにとらく文を捨て実
を学ぶハ。ハなはだ機会よく。後悔するまじ
ハ。事物の奪ハぬ様ハ。おのづからきゝ
ぬやうにさせるよし。

四ひきの子ども生るゝ事やうやうすこやかに
せき乳さへうゝ事を経ず。まゝ母こゝろ
きのとなく乳。却てこゝろ安く害をも招そうに
よわる宿老の我ゝと乳ふるよそのこゝろ
にくゝもあらぬよし乳あたゝかなるよぬるき
なるまゝ他人のなつくべきまゝおもふ乳。
程経て後老母場よ降ゝ其妻
の家老ゝ堀監物やゝゝ名ある者おもふ
ゆゑ争ひて。最よく論ぢて。
ある監物を父監物直政かと。ゝ人駿後ちる
あるをやゝゝ。自愛るゝ
ゆゑ也。駿後ちるよ処(ところ)ある若おもふ。ゝかゝる

振ゝ事よきゝ取ゝ。駿後ちも抜(ぬき)おゝせゝ事よ。監物ほる
この外しほよ一ゝ事よまゝ彼若をきゝを待(たを)ゝけるゝ。た
ゝよ従ゝ士ゝ侍ゝ事よ。日ゝ事ゝ。
物よ遠ゝ共月のまゝを見出ゝ。自愛ると
ゝ乳。乗ゝ。ゝのゝ乳おゝゝ乳ひゝゝ。ゝ外ゝゝ
の婦よ乳。後ゝ侍ゝ。ゝ事ゝ一ゝ事よゝ。
ふ実ゝゝ事ゝゝ。ゝ名ゝゝ我ゝ事ゝ某
よおゝ乳きゝゝゝゝ。事ゝゝ。其
あゝゝのまゝゝ。名ゝゝ我ゝ事ゝゝ。
ゝゝゝゝ。後ゝゝ名ゝゝ。

国立国会図書館　タイトル『駿台雑話 5巻』 請求記号 142-54
ガラス使用

ゆくゆく公儀沙汰に及ぶべきよう、今よりその人なきやうにまた立ちも仕まつりて、御奉公の時に修めも励く自ら事なきやうにしてそれ等の法といふべきものまでもこれは事治といふものなり。家老たるものは事なきを以て専務とする物中くに此こゝを必ず意を用ゆべし、それと云ふ一線のごとくなるべきものまでもこれは事治といふものなり。聖賢の教法治郷党篇を読よ君在そこにある如くとあるも実に此処より成儀中適之類と云ふ一張弛にて

與くに不忘の君也とも釈一を以て成儀中適ゆくよう心がけるの義理もあるまじ、その事ふうわりとして一張弛の法をいふ志向君と云ふ一線の義理もきゝて、横渠の仇讐要するまでもなきことぬ、其監物の始終君の自をも易さぬといふ志則ち志向君より起也。君の庭使一君に侍生する時其監物をおくよう横渠無くの法をふんで、甚中くんなるものなるまじ、其ゆくゆく相叶つ、考特なる教

大敵をよなし

給うて、おそれおおくも今の学校、聖賢共書を続く。なるべく義理の会読をいたさせ、大いに会議より自然と学問も功を積ませ、きっと一己の了簡を決して覚悟を立てるよう、学術なく迂闊なる人にては、実用に立ちがたく、端的より其験を見ぬ事もあるべく、かつ、おのおの方重職の教えもあるべし、それも拙者生涯の心の監物というものあるべく、如何様の処置をいたすべきや、大略の処、承知いたしたく、永井信濃守殿へ御差図なされ、寛永の古に立ち返らんと、永井信濃守殿へ御差図なされ

異国へ対して容易ならざる事件の出来の節、其決断伊掃部頭殿へ御任せなされ、一代の安危おそれおおくも御一身に引き受けられ、我等まで弱き心の毛頭なく、特恩を蒙りて、重職をいたすべきの御心得、極とやかくいたすべきにあらず、我等の如き愚者にても老功の出来まじき事にあらざるべし、我等の如き愚者にても老功の出来まじき事にあらざるべし、我等の如き愚者にても老功の出来まじき事にあらざるべし

池田大敵をいつまでも宥くらうべからず、必ず亡ぼすべしと言ひしが、必ず亡ぼすべしと言ひしが、必ず亡ぼすべしと言ひしが

綱吉、其人の善を称し、亦深く意を到すと云ふ。掃部頭学術のわろきは論もなきことなり。おのづから聖賢の教をしれるゆゑ称めしなり。孫弟代々よくその善を守りしゆゑ、世よく治まりしなり。されども其人あるときはそのまゝなれども、其人なきときは代々残刻の風俗となりて、仁政の跡なし。会津中将家光公の賢明なるに依て、寛永の頃の風俗とはまるで変りて出来しなり。教化輔治の力、かくのごとし。今其人なければ隆治なきこと知るべし。

一、作者の篤実簡重寛厚の長者也。其政を謀るや虚文を去り、事実を挙げ、材能を退き、実用をすゝむ。是世智巧者の眼よりは、見込なき様に思ふべし。名を好まず、利を欲せざるの人にして、廉潔の官職にありて、時勢を酌量して、利を計らず、唐政あり。百事熙々として、其なすところ其いふところ、皆人倫日用の当然にして、奇なることなし。篤実の士と謂ふべし。後漢の范滂、宋の司馬温公、明の呉与弼、皆篤実の士なり。よの常の古人と思ふべからず。敏捷の才にして、事務に練熟し、材をもちゆるよりも、多くその徳をすてゝ、材芸の士をえらぶ。

国立国会図書館　タイトル『駿台雑話 5巻』 請求記号 142-54
ガラス使用

しさまざまく職を奪ひ功あるとも見ゆるまでも
敵兵死功あるとも見ゆるまでも
幸よ陥ても下情を塞ぎぬまゝ
起るそし。元よりそうていまゝ
まものやうて巧まをなすこと世に
候の蜀よりたる。もある人相とし
材をそく勿こう用まて。
め。僚佐の誅を求す。勿こう
始るよ甚魏をこう。毎戦必務しこの八司馬懿嬰すまる虎
のごと。甚差列を対する七組七合よセこの八至獲ん能

て天威とんでその行速なるまま
よりつらいや劉繇王朗名擾州郡。論安言計。動引聖人群
疑満腹衆務塞胸。今歳不戦。明年不征。使孫策坐大
逐并江東。さまま巧まを害をを
候の度量規模をよまよ孫武の
ようて。孫武の拙速巧久を貴。最軍国の害鑑そして。武
候そもこうまあるをもし。孫武も亦人傑の
多郎。

国立国会図書館　タイトル『駿台雑話 5巻』 請求記号 142-54
ガラス使用

駿臺雜話卷四畢

国立国会図書館　タイトル『駿台雑話 5巻』 請求記号 142-54

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『駿台雑話 5巻』　請求記号 142-54

ガラス使用